

monthly JODO

7
2011
July
August
8
合併号



法然上人鑑仰会

結露上入を洪く

二十五霊場六番

四天王寺

六時堂 (念仏堂)

◆御詠歌◆

阿弥陀仏と

心は西に

空蟬の

もぬけ果てたる

声ぞ涼しき

西方の阿弥陀如来をひたすら慕い、ただ往生浄土を願い、一心にお念仏すれば、心はまるで蟬の抜け殻のよう。すなわち苦しみも悩みも何もかも忘れ果てて、すがすがしい声でお念仏をよろこぶことができるのです。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

撮影・若林隆壽

哀悼

陸前高田市

「東日本大震災」中陰六七日
平成二十三年四月二十一日

ただただ掌を合わせ、南無阿弥陀仏のお念仏を称えることしかできなかった。



テレビで何度も目にしたスーパー。3階にまで到達した驚くべき津波の高さ。



ドラゴンレール大船渡線「竹駒駅」付近。気仙川沿いに広がる津波の爪痕。



何台も折り重なった乗用車。こんな光景が360度見渡す限りに広がっている。



瓦礫にはありとあらゆるものが飲み込まれている。経験したことのない異臭。



何の建物であったのかさえ判別できない。堅牢な鉄筋コンクリートも無残。



津波の押し寄せるその瞬間まで、避難広報を続けた消防車。



本当に「猫の子一匹いない」廃墟。生命の気配を感じないゴースタウン。



浄土寺様の参道。衣も袈裟も経本も、すべてが海水に浸かり使い物にならない。
陸前高田市市内唯一の幼稚園「高田幼稚園」も全壊。閉園を余儀なくされた。

ご住職はご本堂を見下ろす高台に駆け上がった。
津波の到達はわずか3分後。



書院は鴨居の上まで水没。欄間の中程に水位を示す痕がくっきりと見える。





浄土寺様墓地より名勝「高田松原」方面を望む。松は根こそぎなくなっていた。

幼稚園の園舎すべてが流され、庫裡・書院は鴨居の上まで水没、ご本堂の荘厳もほとんどが流出したにも拘わらず、奇跡的にご無事だった浄土寺様の御本尊。犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。

平成23年4月28日
震災物故者満中陰の日
若林隆壽



アメのように曲がった鉄骨。かつては密集した住宅街だった荒町地区が。



瓦礫の撤去は急ピッチで進むが、この下にはまだまだ行方不明の方々が……。

浄土

2011/7・8月号 目次

カラーグラビア 哀悼陸前高田市.....	撮影=若林隆壽	1
欣求浄土	大室了皓	6
大震災体験と原発20キロ圏脱出記	中里範忠	14
東北に念仏を弘めた人々②	鈴木聖雄	22
会いたい人 加藤健一さん①	関 容子	28
法然上人を歩く	高橋良和	36
響流十方	小村正孝	38
法然上人をめぐる人々 師を慕う親鸞	石丸晶子	42
誌上句会	選者=増田河郎子	52
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	55
編集後記		56

表紙裏・法然上人を歩く+表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く四天王寺六時堂



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

欣求 淨土

法然上人鑽仰會理事長・副會長
東京・光嚴寺前住職

大室了皓

一、東日本大震災

死者 約一万五千人、行方不明を含めると約二万数千人という大きな災害をもたらした。まさに戦後最大の国難である。

見聞する悲しい出来事の数々には、思わず涙を禁じ得ない。

涙の防災放送、職員の悲劇

津波で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町で、津波到達の直前まで防災放送で町民に高台への避難を呼び掛け続け、自らは行方不明となっていた同町職員遠藤未希さん（二四）の遺体が一か月以上も経って、同町の沖合で発見された。

昨年夏に結婚した夫がプレゼントした腕輪飾りで遺体と確認し本人とわかった。

未希さんは夫と石巻に住み、南三陸町役場まで通っていてこの災害にあった。

迫り来る津波を目前に見ながら、彼女の最期の「早く逃げて……」という絶叫放送を私も聞きましたと泣いた避難民が幾人もいた。

先の戦争末期、樺太の通信所で迫り来るソ連兵を目前にして、最期まで本土への通信使命を果たし続け、遂に凶暴な敵の銃弾に倒れた女子挺身隊の悲劇を思い出した。

なお同じ南三陸町の町長ら職員は危険を感じて、役場から逃げて隣接する災害対策庁舎の屋上に登ったが、その三階まで津波で海に没し、辛うじてアンテナやフェンスにしがみ

ついたものの、残ったのは瓦礫と化した庁舎と、奇跡的に生き残った町長ら十数人の職員だけだった。

悲劇の小学校

石巻市立大川小学校は、北上川の河口から約五キロにあるが、高台への避難中、川を溯ってきた津波に児童や教職員がのみ込まれ、同校全児童百八人のうち七十四人が、教職員も十三人のうち十人が命を失ったという。その八十四人の笑顔の写真が掲げられ、体育館で慰霊祭が行われた。その八十四人の方々の写真を目にして、慰霊の念とともに家族の悲しみに思いを馳せて胸が痛んだ。

二、亡き人との再会

遺体安置所を巡り、ようやく探し当てて再会を果たした家族の心情はどのようなものだろうか。察することも出来ない。

事故で急逝した我が子の遺体を抱き、涙することも無く悲しんだあの日を思い出している。テレビを見て時に涙することはあっても、我が身に現実に起きた生涯最大の悲劇には涙は出て来なかった。涙も涸れてしまった私だった。

遺体と対面している人達、涙も出さずに黙然として佇む姿を見て、心では号泣しておられるのだらうと察したのである。

一、東日本大震災

死者 約一万五千人、行方不明を含めると約二万数千人という大きな災害をもたらした。まさに戦後最大の国難である。

見聞する悲しい出来事の数々には、思わず涙を禁じ得ない。

涙の防災放送、職員の悲劇

津波で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町で、津波到達の直前まで防災放送で町民に高台への避難を呼び掛け続け、自らは行方不明となっていた同町職員遠藤未希さん（二四）の遺体が一か月以上も経って、同町の沖合で発見された。

昨年夏に結婚した夫がプレゼントした腕輪飾りで遺体と確認し本人とわかった。

未希さんは夫と石巻に住み、南三陸町役場まで通っていてこの災害にあった。

迫り来る津波を目前に見ながら、彼女の最期の「早く逃げて…」という絶叫放送を私も聞きましたと泣いた避難民が幾人もいた。

先の戦争末期、樺太の通信所で迫り来るソ連兵を目前にして、最期まで本土への通信使命を果たし続け、遂に凶暴な敵の銃弾に倒れた女子挺身隊の悲劇を思い出した。

なお同じ南三陸町の町長ら職員は危険を感じて、役場から逃げて隣接する災害対策庁舎の屋上に登ったが、その三階まで津波で海に没し、辛うじてアンテナやフェンスにしがみ

「流刑さらにうらみとすべからず。その故は、令（よわい）すでに八旬に迫りぬ。師弟おなじ都に住すとも、娑婆の離別ちかくにあるべし。たとい山海をへだつとも、浄土の再会なんぞ疑わん」と。

戦時中、戦友との別れに当たって「九段（靖国神社）で会おうぜ」と言い交わすのが通例であった。後々になって、「九段だとは」と考えることになった。

九段の再会とは、当時の異常な社会情勢の中で世間に広く言いならされていた言葉にすぎない。慣用句でもあった。神や仏の約束や誓いなどというものではない。

ところが阿弥陀経の「俱会一処」は阿弥陀仏の私たちに對する「誓い」なのである。「九段の再会」とは天と地の違いがある。

ではどうしたら浄土で再会することができのだろうか。

それにはまず逝った人々先に浄土へ行ってもらっていなければならぬ。

だがこの人達はお念仏を唱えていただろうか。唱えていたような記憶もあるが不安が残る。果たして極楽浄土へ行っているだろうか。不安だったら法然さまの言葉を聞こう。

四、廻向（回向）

「亡き人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀はとけ光をはなちて、地獄餓鬼畜生を照らし給い候えば、この三惡道に沈みて苦を受くるものその苦しみやすまりて、命おわりのち、解脱すべきにて候」と。この言葉をいいかえれば、

私たちがその人を回向して念仏を唱えればその功德で、阿弥陀仏はその人を探し出し、たとえ地獄に落ちて苦しんでいたとしても、必ず救い出して、極楽浄土へ迎えて解脱出来るようにしてください、というお諭しである。亡き人が、念仏したかしないかは関係ないことだ。私の念仏の功德で極楽へ迎えていただけるのである。

亡き人への念仏回向が大切になってくる。

五、自身の極楽往生

再会のためには、私自身が極楽へ往生しなければならないことは当然である。

そのためには、往生を願ひ念仏に励むことだがいくら念仏に励んでも、間違ひなく往生出来るのかどうか不安になってくる。どうして不安になるのだろうか。信心が足りないからだろうか。

昔の人も悩んでいたが、これは念仏の教えの最も肝要なことだ。

高野の明遍僧都という著名な上人の御信者が、妄念のために往生が不安になり上人に尋ねに来た。

「誠にただ妄念おこるをば、いかがし候べき」

上人答えて、

「妄念おこれども、本願力にて往生するなり」

これを聞いて頭をかかえていると、上人がつぶやかれた。

「妄念おこさずして往生せんと思わん人は、生まれつきの目鼻を捨てて念仏申さんと思うがごとし」

往生不安と悩み疑うのは、弥陀の本願がまだよくわかっていないからだ。煩惱無尽の凡夫をこそ救おうというのが本願である。賢人だったら持たないだろうが、凡夫だからこそ不安感や疑心を持つのであって、このことは凡夫の往生を誓う本願には既に織り込まれているのだ。往生を疑う心が起き不安になるのは、信じようとする心を持っている証拠だ。信がなければ疑心の起きるはずがない。信じて念仏に励む、それで充分なのである。疑心が起きたとしてもそれが凡夫の限界である。疑心があっても往生は決定しているのである。上人はどうしてこの事がわからないのかと繰り返し説いておられる。

「散心ながら念仏申す者が往生すればこそ、めだたき本願にてはあれ。心の乱るるは、これ凡夫のならいにて、力およばぬことにて候」

また上人ご自身の「なんとか往生したいものだ」という呟きを聞いた弟子が、上人でも不安をお持ちなら他の者はどうしたらいいんですかと伺うと、

「蓮台に乗らんまでは、いかでかこの思いは断え候べき」とお応えになったという。

妄念に悩まされ不安におののく、それが凡夫である。そのままの乱れる私を救おうという大願をも誓って弥陀は夜も昼も私に呼びかけておられる。

「わが名を呼べ」と

本誌連載中の前田和男「小説・快僧渡辺海旭～
壺中に月を求めて」が単行本になりました。



8割引にてご購入いただけます！

これまで連載されたものに、留学前の幼少年時代のエピソードが加筆されています。本連載とあわせてご味読をいただければ幸いです。

正価3990円（本体＋税）のところ、下記出版社（ポット出版）へ「月刊浄土の読者」と申告の上、お申し込みいただければ、送料込み3000円でご購入いただけます。

メールでお申し込みの場合

注文先のメールアドレス：books@pot.co.jp

●送り先の、お名前／郵便番号／ご住所／お電話番号／Eメールアドレスを明記ください。

電話での注文も受け付けています。03-3478-1774 担当・尹（ユン）、那須

郵便振替用紙を同封してお送りします。

詳細は以下でご覧になれます。

<http://www.pot.co.jp/books/isbn978-4-7808-0160-6.html>

なお、本誌連載は、本書にはない新しいエピソードを紹介しながら、引き続き継続されます。

大震災体験と

原発20キロ圏

脱出記

2011年4月1日記

東電福島第一原発から十五キロの南相馬・被災者

中里範忠

3.11 東北関東大震災による大津波、引き続く原発の炉心溶融による高濃度放射能拡散。わたくしはそれを現地南相馬市で体験し、原発避難民となり埼玉県三郷市まで避難しました。以下はその体験記です。

拙宅は福島県の浜通りにあり、海岸から西に9.5キロメートル、海拔100メートル、そして東京電力福島第一原子力発電所から北北西に15キロメートルの地点に位置していた。住所は、福島県南相馬市小高区川房字西畑

【前兆】地震は突然襲ってきたように思われているが、そうではない。3月9日に3回、10日朝に1回それぞれ震度4ぐらいの揺れがあり、10日朝のときには津波注意報も発令されていた。それらの地震はいつものそれとは違うように感じた。すなわち、地震がくる前には地鳴りがし、揺れが治まっても心底に不気味さを残すような感じで、私は前日の10日

に、海岸から100メートルぐらいしか離れていない保養施設における昼の会食（私は集落の老人会の会長を仰せつかった）の挨拶で場違いと思いながら昨日来の地震を話題にしたほどでした。（私が生まれた1938年の11.5～11.7に福島県東方沖地震が起きM7.5クラスの本震・余震が4回も続いたということ、ここを震源とする地震の周期は約70年といわれているということを語っていた）

【11日】11日家には私と猫2匹、犬1匹のみ。妻は前日から東京に。

地震がきた。数秒後には靴下のままぬれ縁から庭に飛び出した。凄い揺れ。もしかすると家が崩壊するか、前の小高い山が土砂崩れを起こすのではないかと山の斜面を注視もした。庭に停めていた2台の乗用車が踊るように跳ね上がり、繋いでいた飼い犬が恐怖の叫びをあげ、室内にいた足の不自由な飼い猫が凄惨な勢いで飛び出してきた。かつて経験した

ことがないぐらい長い揺れがつづいた。やがて治まった。

皿が割れ、本棚の本が上部ほど崩れ落ち、妻が丹精こめて作った梅酒の瓶が割れ、中身が流れたでいた。建物には目立った損傷はない。隣家には独り暮らしの老婆がいるので様子をみにいったら、同様に台所の食器類が崩れ落ちていたが、同女は畑仕事をしていて無事。

道ばたにある畳一枚分ぐらいの石碑が北側に転倒。墓石も古いものは転倒もしくは横向きに。近隣の家屋もコンクリートブロックや大谷石造りの塀など多くは根元から転倒。屋根瓦が一部崩壊。

テレビは仙台市の南、名取川付近で数メートルの津波が押し寄せてきたことを繰り返し放送していて、以後テレビにくぎづけ。

【12日午前】小高の街中の被害が大きいとの話をきいたので海岸から約3キロの市街地に。建物が全壊しているもの、半壊のものの相当数。

比較的古い家がやられている。海岸から2.5キロぐらいにある陸橋にあがると、津波の水が引かないのか、海岸のほうまで一面湖のような状態。国道6号線の手前で、危険を理由に消防の方から進行を止められたのでUターン。水が引いたところでも津波が運んできたドロが10センチ厚ぐらいで地面を覆っていた。何台もの自動車が仰向けに。電話が通じないので、気になる方々の家を訪問したが多くは留守がち。九条の会代表の佐藤鶴雄さん方はご夫婦とも無事。但し、建物内部は家具が倒れ、扉が外れ、崩れ落ちた書籍が散乱。

【12日午後】福島第一原子力発電所から真北に約7.5キロにある妻の実家から、妻の兄夫婦と甥夫婦及びそのことも2人の計6人が、拙宅に来た。なんでも、原発が危険な状態になり原発から半径10キロ内に避難指示が出たので、避難先として当家に来たという。その後さらに妻の姪夫婦とことも2人、飼犬1匹が追加。はたして、我が家は原発から

何キロかを国土地理院の地形図で計測すると約15キロ。ひとまず安心と、私は飼いだを連れて散歩に。

家に戻ると、血相を変えた甥が「早く室内に入れ、原発が爆発した」という。テレビを注視。4時ごろだったろうか、避難指示の範囲が半径20キロまで拡大されてしまった。こうしてはおれない。逃げなければならぬ。テレビは北へ逃げろという。しかし、避難先を予め決めていたわけではない。どこへ行けばいいのか。ともかく、避難してきた10人に私と私の飼いだ1匹を加え、若干の食糧と夜具を積んで3台の車で逃避行開始。県道35号線を北に向かうが、途中道路崩落の危険があるのだから、迂回せられた結果旧国道に出たところで、渋滞に。テレビを観ていた人が一斉に逃げ出したのだから渋滞になるのは当たり前。夕闇が迫り、ヘッドライトとテールライトの光だけが長く続いている。車はなかなか進まない。ガソリンタンクのメーターは

心細い。埼玉県三郷市にいる妻からは三郷にくるようにとメールが入るが、緊張と興奮で応答する気にもなれないし、暗くなっているのにこれから300キロ以上も走る気力が失せている。カーラジオから楽観的なニュースも飛び込んできた。じゃ、今夜は拙宅に戻って、原発の状況を注意深く見守って明朝態度を決めようということになり1台の車とは連絡がとれないまま2台で舞い戻ってしまった。炊き出しのようなおにぎりだけの夕食。

【13日】原発の状態はさらに深刻化しているようだ。やはり避難せざるをえない。妻がいうように三郷市に行こう。地震と原発で国道6号線はダメ、常磐自動車道も東北自動車道も緊急自動車のみしか通行できない。となれば、南相馬市から飯館村・川俣町・福島市・国道4号線を郡山市・宇都宮市・古河市・草加市・三郷市のコースしか考えられない。小高地区ではガソリンが手に入らないが川俣町なら可能かもしれない。もしダメなら、私の

車を川俣町の道の駅駐車場に乗り捨ててゐるしかない。気にかかるのは、愛猫2匹が捕まらないので置き去りにせざるを得ないことだ。避難期間もそんなに長くはないだろうとの希望的観測で、猫の餌の袋を破り、迎えにくるまで元気でいてほしいと願いつつ、午前8時ごろ私の車を加え3台で家をでた。

道路の混雑は昨夜ほどではない。しかし、途中当てにしていたガソリンスタンドは売り切れなのか、クローズしたまま。結局、川俣町でもガソリンは手にはいらない。昨夜離れてしまった車と合流したうえ私の車の放置を決め、一番奥まった駐車場所に置いた。フロントガラスの内側に「原発避難中」と「ケイタイ番号」を書き付けた紙を貼った。

二本松市でガソリンを補給するのに2時間ぐらい待つ。順番がきても満タンにはできない。20リットルだけ。朝飯も十分にとらないうえ、手持ちの食糧もない。コンビニに寄ったが、パン・おにぎりのたぐいは一切なし。

鳥の唐揚げやソーセージ、ジュースで腹ごしらえ。

道中、ケイタイに友人たちから次々に着信やらメールが入る。私のことを案じてくれていることが痛いほどわかる。一言ふたこと無事であることを伝え、手短かに電話を切る。三郷で待っている妻には、全員が着の身着のままであること、とくに姉（義兄の妻）は地震のときは畑仕事で、野良着のままであることを伝え、11人の下着などを買いそろえておいてくれるように依頼。

宇都宮市の手前でガス欠直前。車のディーラーならガソリンの備蓄があるかもしれないと、無理を承知でマツダのディーラーにお願いしてみたが先方もなくて困っていた様だ。ガソリンは入手できなかったが、先方の応対に困った者同士の友情を感じた。幸いなことに宇都宮市のガソリンスタンドでは長時間待ったが、満タンにしてくれた。

とうとう、出発から16時間かかって、14日

の午前0時30分ごろ三郷の避難場所のマンションに到着した。このマンションは私が現職（千葉地方裁判所松戸支部勤務）で仕事していたとき住んでいたところで、退職後南相馬市に転居してからも保有し続けていたもの。

妻の友人たちが、親身になって受け入れの準備をしていってくれ、緊張と疲労困憊の新避難民を暖かく迎えてくれた。食糧・衣類などが相当用意されていたのだった。到着した安堵感と感情の高ぶりからなぜか涙がながれて仕方がなかった。

【14日～17日】原発が刻々と危険な状態に陥っていったことはテレビ報道のとおり。

なんともお粗末としか表現できない。安全だ、安全だと言っていたことはウソだったのだ。そのうえ、誰よりも原発は危険なものだと知っていたからこそ電力会社は職員全員を原発から避難させようとしていたということを知って、なんという心根なのかと感じた。

私たちは、この間68㎡のマンションに大人

11人と中学生1人、犬2匹で雑魚寝した。私たちが20キロ圏内から逃げてきた原発難民であることを知ったマンションの居住者の多くが、現金・米・パン・果物・衣類・防寒具・毛布・花・缶詰・掃除機・掛け時計等々を携えて激励にきてくれた。中には無料カットを申し出てくれた美容師さんも。これらの好意をありがたく頂戴した。

【18日】三郷市の市議員の方が、三郷駅前で震災の被災者救援の街頭募金をするを知って、被災者本人として傍観するわけにはいかないと、一緒にマイクを握り訴えた。一緒に避難してきた中学生も含め、みんなが地震と津波と原発爆発の体験を語った。ここでも、多数の方が快く応じてくださったように感じた。1時間で11万円余。取りまとめ部署に上納したとのこと。

【24日】12人のうち一家族4人と犬1匹が、千葉県酒々井町に仮住まいを確保して移動。

【25日】残る8人のうち6人（老夫婦と若夫

婦及び17歳と14歳の男の子」が同マンションの空き室を確保して移動。残るは私たち夫婦と犬1匹になった。

【30日】20キロ圏内から逃げ出した人が貴重品を取りに一時立ち入りしていることが伝わってきており、私も放置してきた車や愛猫や忘れ物を取りに戻ることにした。息子がガソリンを詰めた携行缶を数個積載して、常磐自動車道・磐越自動車道・郡山市・福島市・川俣町・南相馬市のルートで郷里に入った。途中原発から25キロ地点あたりで、立ち入り禁止の検問。検問していたのは広島県警の警察官。応援で昨日来たという。圏内に住所があることを確認して通行を黙認。相互にご苦労さまと声を掛け合った。圏内は「死の街」。人の姿は全くない。ときおり、同じ思いで一時立ち入った方と思われる車とすれ違う。車道にハスキー犬が1匹、人恋しいように寄ってきた。腰がふらついているようだ。運転していた息子が車を停め、にぎりめしを与えた。

しかしガツガツ喰うのではなく、喰う気力も失いかけているのか少しずつ喰い結局全部喰った。飼い主が避難して半月以上経っている。情緒的な表現になるが、この動物に何の罪があるのかと思うと可哀想になり、抑えようのない怒りがこみあげてきた。犬のついでに牛や馬について触れると、南相馬市の山間部では和牛・乳牛・養豚などで生計を立ててる人もいる。これらの人は避難するに当たってどうしたのだろうかと思つて、調べてみた。ほとんどの人が避難してしまつた後も乳牛の乳を搾り続けた人、毎日餌を与えに避難場所から通っている人などがある。また、相馬地方は武者装束で馬駆ける野馬追祭の地だ。凝った人は年に3日間のお祭りに出場するために馬を飼育している。津波に流された馬もいるのではないかと心を痛めている。私の知人は多数頭の馬を飼育し日頃は乗馬クラブなどを営んでいるのだが、避難するにあたり成田市の厩舎に預けたという。

私と息子が自宅にいた時間は約1時間。息子が戸外にいた猫を探し出し各別にゲージにいた。一時帰宅の主たる目的は2匹の猫を収容することにあつたから目的は達した。私は買って間もないパソコンや日用品・服用している薬・米・コーヒー豆などを車に積み込んだ。しかしあとになってみると、デジカメを積んだのに充電器を忘れたり、買いためていたタバコを忘れたり、妻に頼まれた絵画用イーゼルを積みながら絵の具を忘れたり、リストアップしたメモ書きを見忘れたりと失敗を重ねているのは、いかに慌てていたかがわかるというものだ。防護服や大げさなマスクを用意していったが、行動の妨げになるように結局使わなかった。帰途、川俣町の道の駅に放置していた車にガソリンを十分に入れて三郷にもどった。

以上は、全く個人的な体験に過ぎませんが、避難指示が出て慌てて避難した人はみな同様の体験をしているはずだ。高齢者や病人、乳幼児を抱えて避難した人、集団での避難生活を送っている人すべての人が筆舌に尽くせない苦労しているはずだ。東北人は自分自身のことを話さない人が多いと思う。口に出さないから現状に不満がないと思つたら違います。安心して日常を過ごせるのが一番、原発は要らない。

中里範忠

一九三八年生。一九五七―二〇〇四

東京地裁・千葉地裁書記官

退職後、南相馬市に在住

小高9条の会事務局長。

東北 念仏 弘めた 人々 をに

鈴木聖雄

すずき しょうおう

山形県谷地藍願寺住職

村山地名研究会代表幹事

アラハバキ学会副会長

東北アイヌ語地名研究会理事

舞草刀研究会理事

著書『奥羽近代念仏験記』

『無能和尚行業記並びに行業遺事』

②

前回の金光上人については、今より八百年以上も昔の念仏行者の有りようを示しましたが、そうした素地が出来た後、東北への本格的伝道が行われました。

鎌倉が幕府政治の中心となるや、各宗の学僧が鎌倉入りするなか、浄土の僧では、三祖を継ぐ良忠上人（一一九九―一二八七）が幕府評定衆の一人であった北条朝直の外護のもと、その寄進寺である悟真寺に住んで、浄土門の拡張を図りました。

この辺りから、京都や西国中心の浄土宗が東国にも伝播していきます。

また、良忠上人の門人で、大きな影響を受けた高僧に寂恵・尊観・性心・然空・道光・慈心の六上人がおられますが、各人共、夫々の派を立てられます。

そのなか、尊観上人（一二三九―一三一六）の流れが、後々、東北に波及していきました。

尊観（良弁）上人は、下総国香取郡鐙木村の生まれで、幼少の頃より師・良忠上人に随い、三十年余も行動を共にしています。鎌倉の名越にあった善導寺を中心に布教していったので、この流れを名越派と呼んでいます。

東北地方に開かれた浄土宗の寺院は、この流派が最も多く、江戸後期に見る資料では、磐城国五十六ヶ寺、磐代国二十三ヶ寺、羽前国二十八ヶ寺、陸中国十九ヶ寺、陸奥国三十三ヶ寺、羽後国一ヶ寺（「江戸後期における浄土宗名越派檀林の実況」長谷川匡俊師）などとなっています。

尊観上人の教えは、明心（良慶）上人（一二六九―一三三六）へと次第され、続いて、良山（妙観）上人へと伝えられます。

良山上人（一二九三―一三六一）は、生誕地が須賀川北作田（今の福島県）の人であつ

て、伝法を承けるや故郷に戻り、隣郷一帯に布教していました。当初、磐城郡好間に住みましたが、後に矢ノ目村へ移り、如来寺を開山しています。寺史では元亨二年（一三三二）としていますが、最近の研究で十五年程遅れるのではとも考えられています。

ここに漸く、東北における本格的な仏教教育の檀林（議義所）が創建された訳で、以降、多くの門弟が巣立っていきました。寛永二十年（一六三五）における末寺は、三十二ヶ寺を数えています。また、良山上人自身も、これまでの上人方同様、多くの著書を出されています。

上人亡き跡は、門弟の中から有誠（祐誠）上人が二世を継ぎ檀林に残った子弟を教育、その中から良就上人なども輩出されました。

良就（十聲）上人（一三四九～一四二七）は、ほど近い梅福山に応永二年（一三九五）に専称寺を開山しますが、爾来、修学に臨む者数を知らずの如くで、元禄九年（一六九六）取り調べの『浄土宗寺院由緒書』には、末寺二百四ヶ寺を載せています。

奥羽を駆け巡った 無能上人むのう

前置きが長くなりましたが、宗祖法然上人とその真名弟子である金光上人の時代から、磐城に両檀林が成立するまでの経緯を辿らないと東北への開教の道筋が不明になりはしないかと述記至しました。



本論である無能上人、そして、貞伝上人の活躍は、江戸の中頃ということになりますので、この間にも多くの僧侶が東北や、関東地方に檀那（開基の施主など）との縁を見出し、寺院を建立していった訳です。そうした小規模寺院に巡錫し、教化されたのが無能和尚（おとし）でした。以下を上人に関する刊行本『無能和尚行業記』『無能和尚行業遺事』『無能和尚勸心詠歌集』『近代奥羽念仏験記』などで、追ってみようと思います。

上人は、天和三年（一六八三）、陸奥国石川郡須釜村（須賀川市）の矢吹家に生まれました。十四才の時に発心され、仏前で念仏を唱え、また、『阿弥陀経』や『法華経』普門品などを誦誦（じくじふ）していたと言います。

元禄十二年（一六九九）、十七才の春、伊達郡桑折（こおし）の浄土宗大安寺に身を投じ、得度の後、五月には、名越派檀林である専称寺に入寺しています。

翌年八月、羽前亀岡（山形県高島町亀岡）大聖寺に七日間参籠し、文珠菩薩の冥助を仰ぎ、早く自行化他の所願を成し遂げられるよう祈願をしたり、下総の飯沼弘経寺や江戸増上寺などの檀林で学んだりもしています。

宝永元年（一七〇四）五月、二十二才の時、専称寺宝前において、欲事を断ずる誓いをたて、七月よりは、日課一万称を誓約、また、八月には、磐瀬郡大栗村の阿弥陀堂で七日間の断食念仏を行じたりと、念仏行者へと傾いていきました。

翌、宝永二年（一七〇五）、専称寺二十一世良通上人より宗脈と戒脈を伝受し、宗門人として認められますが、この時に興蓮社良崇の法号を授かっています。

その後も益々持戒を固くし、二十五才の時には、常坐不臥、即ち、身体を横に臥す（ふ）ことなく日を送り、日課念仏も三万称と加増し、それまで行っていた読経なども一切取り止め

て念仏三昧の生活に入っていました。

さらに宝永六年（一七〇九）の二十六才の時には、通世とんせいの身とならんことを決意し、昼夜に至り墨衣を脱ぐこともなく、日課六万遍の口称行者へと進まりました。

また、正徳三年（一七一三）、上人三十一才の春には、伊達郡小島村の梅松寺に庵を結ぶのですが、この時、自ら剃刀を以って男根を断つといった行動に出ます。周りの者が、何故その様なことをするのかを尋ねますと、「唐の青龍寺に釈光儀という人がおって、自ら根を断ちて、非法の障礙を遁れ、志を守りて利益多かりし事、僧伝に称する所なり」或いはまた、「梅尾とがのおの明恵上人、仏法のためには生命をも却り見るべきに非ずとて、自ら右の耳を切り給ひし事、彼の伝記に載せり」と言い放つて、その心情を明らかにしています。上人は、また、この年の末に「制戒七十二件」を録しますが、東北に伝えられた「浄土律」には、こうした戒律も影響しているものと考えます。

念仏勸化による靈驗譚たんを生んだのは、この正徳三年五月より、享保二年（一七一七）頃までに集中しているのですが、それ等をまとめ、上梓したのが『近代奥羽念仏驗記』三巻であり、同類のものに『勸化道場奇特集』が残っています。

その中から一文を紹介します、と次の様な不思議（勝境）現象を載せています。

奥州伊達桑折本町次郎左衛門妻口上書

尊師、大安寺にて御法談の節、所作五百遍受け奉り候。其の夜御念仏唱え居り申し候処、光明の中に御長三尺斗りの金色の如来、後に輪光輝き御立ち遊ばされ候間、是れは夢か現かと心を付け、暫く拝し罷り有り候らえば、如来の御前より白雲渦巻き上り候らえば、其のまま仏体御消え遊ばされ候。又、同十四日の晩、御法談の最中に御



仏壇の天井より大提灯の如く成る物、勢至菩薩の御前へ下り申し候を拝し奉り、有難く存じ奉り候間、所作千遍に加増仕り候。以上。正徳五末年十一月十五日

相馬領榑窪村 今野与兵衛口上

拙者姉は同村作助、とめには母にて当年六十九才に罷り成り候。この者、七、八年以来眼力弱く、近所の往来も心よからず候処、当三月、立石御法談の節、所作千遍受け奉り相勤め候らえば、両眼漸々明らかに罷り来り、この間は、自由に往来仕り候。之れに依つて、有難く存じ奉り、所作一万三千遍に加増仕り、御名号を願ひ奉り候間、拙者名代に参上仕り候。五月二十五日

この様な奇瑞現象が法筵各所で起り、村人達は誓詞を以つて、会座の住持に注進しましたので、住持は、法座に同席した近隣寺院や檀徒総代に至るまでの証判を得て、無能上人へ、或いは、随身の僧へと届けられたものです。

上人の巡錫は、正徳三年八月に始まっていますが、初出は、出羽の天童、三宝寺においてでした。幕府の勤儉政策などで、行事は全て夜に興行するのが慣習化されていましたので、「四十八夜夜念仏」として行われています。

この時には、先ず『選択集』の講説があり、次に日課誓約、そして、念仏一会という次第でした。また、この間の受者は、三七〇〇名と記されていますから、法筵の賑わいが感じられます。

九月の中秋には、庵の在る伊達郡北半田に戻り、念仏三昧の生活を送っておられた訳ですが、郡内の寺院や檀那等から依頼があれば、早速出掛けられ、日課念仏を誓約したり、名号符を賦与したりの念仏勸化が続けられています。

つづく

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

加藤健一さんの舞台を初めて観たのは、『熱海殺人事件』（つかこうへい作）。新宿紀伊國屋ホールだった。山藤章二夫人の米子さんが、目を見張るような芝居、加藤健一さんという役者がとにかくすごいよ、と誘ってくださった御一緒した。

その加藤健一が客席後方から派手に登場してくる強烈な印象は、今も薄れていない。つばの広い帽子にサングラス、つなぎの服でマイク片手に「マイウェイ」を歌いながら私のすぐ横を強いライトを浴びて通った。舞台で帽子をぬぐとオカッパ頭で、サングラスをはずすとさらにその下に小さな眼鏡をかけている。場内は意表を突かれて笑いの渦だった。

あれはいつごろのことだったのかはつきりしないが、犯人大山金太郎の役はずっと変らず加藤健一だけけど、刑事役が三浦洋一（その後風間杜夫に変わっている）だったので、昭和五十四年の公演、ということになるらしい。東京・江古田にある加藤健一事務所に加藤

さんをお訪ねして、まずそのへんから伺った。

「僕が『俳優小劇場』の養成所を卒業して間もなく、二十一歳のときに『新芸』という劇団を作って、つかさんの芝居ばかり上演していたんですよ。『熱海殺人事件』は『新劇』という雑誌に載っていたのを読んで、すごく面白かったんです。作者の許可をもらって自分たちで上演したんです。でも初演は文学座のアトリエ公演で、金内喜久男さんたちなんです。僕はそれを観てません。だからあの犯人金太郎の役作りは僕の考案なんです。それを観たつかさんから声をかけられて、つか劇団に客演で同じ役ですつと出るようになりました。ですから紀伊國屋ホールで、というのはつか劇団のときですね。結局つか劇団が解散するまで七年間、僕はほとんどのつかさんの芝居に客演していたんです」

つか芝居というのは「口立^{くだ}て」で作られるそうだが、加藤さんもその経験をしたのだろうか。



加藤さんの一世一代の当り芸となった「審判」(1980年)。

「しましたよ。『新芸』でつか芝居をやるときは、印刷された台本を読んで上演を決めたからよかったです、つか劇団の場合は稽古初日に台本はないんですよ。それでつかさんが、役者それぞれの役を感情をこめてしゃべるわけです。それをこつちがオウムみたいにしゃべる（笑）。あ、今のナシな、つて言われたり、昨日やったところは全部ナシ、というのもよくあつたしね。非常にむなしい気がした。それに口立て芝居というのは、作者の感情表現もこみで与えられちゃうわけだから、活字から立ち登ってくる感情を探り出して役作りをする、という役者本来の大切な作業を忘れてしまうんじゃないか、これは危い、という気がしてきたんです」

加藤さんは三十一歳にして加藤健一事務所を設立（昭和五十五年）する。

「自分で好きな本をまず見つけて、自分がこのせりふをしゃべってみたい、これがうまく言えたらさぞ気持ちがいいだろうなあ、と思

える芝居を上演して、舞台上で役者が輝いていれば、それを観るお客さんもきつときめいてくれるだろう、と思つたんです。それで最初に自分で見つけたのが『審判』（バリー・コリンズ作）という一人芝居。これも本の帯に近日江守徹上演決定、とあつたんですけど、でも夢中になつて読んで惚れこんで、これに上演するために加藤健一事務所を作つたんです。つかさんもちょうどそのころ俺は小説に専念するんだと言つて、劇団を解散しちゃうんですけどね」

昭和五十六年、つかこうへいは小説『蒲田行進曲』によつて直木賞を受賞している。

その翌年、加藤さんもつか劇団時代に出演した『蒲田行進曲』の演技と、のちに一世一代の当り芸となる『審判』の上演が早くも評価され、紀伊國屋演劇賞個人賞を受けている。

山藤米子さんは、加藤健一事務所の旗揚げ当時、銀座のみゆき館という小さな劇場で芝

居をしていたところからの御晶履で、あの情熱的な演劇青年のころと今も少しも変わっていない若さに驚いている、と言っていた。

加藤さんにインタビュしたのは、やはり自分で選んだ『滝沢家の内乱』の稽古中だった。これも吉永仁郎戯曲集全四巻を読破し、一番面白かった作品だからだそう。

この上演が加藤健一事務所がプロデュースした芝居百本目の記念公演になる。

「僕は物を創り出す人間を演じるのが好きで、これは『南総里見八犬伝』の作者、滝沢（曲亭）馬琴が主人公だし、今年の二月には作曲家のリヒャルト・シュトラウスを『コラボレーション』（ロナルド・ハーウッド作）という芝居で演じたばかりです。『滝沢家』のほうは、馬琴が晩年目が不自由になると、死んだ息子の嫁のお路が口述筆記をしてくれるようになる。それまでの舅と嫁の心の葛藤が細やかに描かれてるんですが、なぜ内乱かと言えば、馬琴の女房お百と長男の宗伯というの

が両方ともひどい病い持ちで、姿は見せないんですがすさまじく馬琴をスポイルする。この二人の声の出演を僕の盟友である高畑淳子さんと風間杜夫さんが引き受けてくれたんです」

さつそく『滝沢家』の台本を読んでみると、馬琴は何かにつけて屋根の上に登って夢想するが、そう言えば健一少年も屋根の上で空を飛ぶことを夢見ていたということ、そこに相通じるものを見出したのかもしれない。

「そうですね。僕は静岡県の豊浜という半農半漁の町で生まれ育ったんですが、近くの映画館で宇津井健さんが気持ちよさそうに空を飛ぶのを観たりすると、もしかして鍛練すれば自分も空を飛べるようになるんじゃないか（笑）、なんてバカなことを屋根の上で考えてました。だから馬琴にアイデンティティーを感じたのかもしれない。僕の役作りって、人間や物ごとをよく観察してその形をとらえるんじゃないくて、どんな役でも自分の中に必ず

共通するものがあると思うんで、たとえ冷酷で意地悪で暗い、というような役でもね、それを引き出してきてその人物を作り出す、というタイプの演技をめざしてるわけです。そういう意味で馬琴には非常に近いものを感じて、この芝居に惹かれたのかもしれない」

加藤さんが昭和二十四年生まれとはとても信じられないほど、演劇に対する真摯な姿勢や、気骨のある物の考え方に若さがある。もちろん見かけもうんと若い。

屋根の上で、将来役者になることを少年は夢見なかったのだろうか。

「まったく考えてませんでした。僕のうちは農家で、どこにいても遠州灘の波の音が聞こえてくる静かな村でした。七人兄弟の六番目なので、小学校の先生からは健六と呼ばれてたんです。健一は本名なんですけどね。作文の題に将来何になりたいか、というのが出て、サラリーマン、って書いた（笑）。田舎の子

には背広着て盆や正月に帰省してくる男たちがかつこよく見えたんですよ。先生はがっかりしたみたいです。でも六年生の学芸会では『因幡の白兔』の芝居で、大黒様の役をやらせてくれました。大きな袋を肩にかついだ、大国主命。主役です」

加藤さんが「学芸会」という古い言い方を思い出しておかしかったり、「どうして日本にワ二なんかがいたんでしょうね」と、ひとしきり昔をしのぶ。

「古事記」所出の出雲神話によれば、白兔が淤岐島おのしまから因幡国（鳥取県の東部）に渡るため、海上に鰐鰯わにさめを並べせ、数を数えてやるとあざむいて背中の上を渡るが、最後の一匹に本心を明かして嘲笑したので、兎は皮を剥ぎ取られ、赤裸になる。そこへ八十神が通りかかり、潮水に浸せば治る、と嘘を教えたので、余計に傷がひどくなって兎が泣いていると、意地悪な兄さんたちの重い荷物を背負わされた情深い大国主命が本当の治療法を教えて白

加藤さんプロデュース100本目となる「滝沢家の内乱」右は加藤忍さん。



兎を救う。鰐鮫は凶悪な鮫のことで、南国のワニではない。

話が横にそれたが、加藤さんに主役を振った担任の先生は、健六少年の深い声や、優しい人間性の魅力に疾うから気づいていたのだろう。

しかし高校を卒業した加藤さんは、大阪の大手建設会社に就職し、めざした道を歩き始める。

「最初は道路工事の飯場みたいなところに配属されたんです。近くの現場事務所です務をとって、夜の弁当を運んだりして飯場に寝泊りする。一日中仕事みたいだったけど面白かった。半年たつて北浜支店に戻ったら、念願のサラリーマンなのに性に合わなくて退屈でした。朝八時に行っても皆さん新聞読んでるんだけど、たとえば一分遅れても遅刻になつて、タイムカードが真っ赤になる。一か月して、君、やめるか？ と言われたから、ハイやめます、つてあっさりと。飯場にずっ

といたらやめなかったかもしれない。あのころ岡林信康さんの『山谷ブルース』というフオークソングが流行ってましたけど、そんな気分の飯場暮しは、あとで思うと演劇の作業現場に通じるものがあつたんでしよう」

加藤さんは先輩をたよって上京。毎日ごろごろしながら、写真の学校とかデザインの学校とか、表現の学校の募集要項を取り寄せてみたが、中で月謝の一番安かつた俳優小劇場の養成所を受けてみることにした。

「小沢昭一さんとか演出家の早野寿郎さんが率いる劇団で、渋谷の山手教会が試験会場でした。三十人くらい採るのに三百人も来てましたね。海水パンツで並ばされたりして、いやだったなあ。あとで聞くと早野さんは役者の身体つきをとっても重要視する人だったそうですね。面接は小さな部屋に小沢さんが一人でいて、大勢に会わなくちゃならないから一人当りがものすごく短い。何か芝居のことを訊かれるのかと思つたら、いきなり金はあ

るのか？ って（笑）。つまり月謝が払えるのか、つてことだろうと思つて、ハイあります、つて。ほんとにはなかったけど、そう言つたら落とされると思つてね。質問はそれだけでした」

ずつとのちに加藤さんは大先輩の小沢さんとの対談で、そのことを訊ねている。

小沢さんの答。

「それ（月謝のこと）と、もう一つは金の問題を訊くと、その人の地肌が出る。本性が出るからね。金の話をぶつけるのが人を見るのに一番手つとり早い」

さすがに人生の達人。小沢さんはひと目で加藤さんの資質を見抜き、合格の印をポンと押したのだろう。

（つづく）

加藤健二プロデュース百本記念公演

「滝沢家の内乱」

七月十三日（水）二十四回。

下北沢・本多劇場

問い合わせ 03・3557・0789

法然上人を歩く

二十五霊場六番

高橋良和著 『法然上人紀行』 (探究社) より抜粋

四天王寺

六時堂

聖徳太子開創の大阪の名刹四天王寺は、庶民の寺であり、大阪とともに生きぬいてきた古刹でもある。昔は天台宗であったが、今は和宗の本山になっている。

第二次世界大戦で戦災をうけた伽藍も、そのほとんどが復興し、鉄筋の新しい堂宇が新様式で庶民の心を結んでいる。

その昔、聖徳太子が最初にここで念仏されたというところであるから、法然もこの縁りの四天王寺に参詣の折には、このお堂で念仏したとつたえている。

それもさることながら、二十五霊場のひとつとなったわけは、四十八巻伝の第十六のところに、

僧都上人所藏の『選撰集』を披覽して、この書のおもむき、いさ
さか偏執なるところありけりとおもいて、寝られたる夜の夢に、四
天王寺の西門に、病者かずもしらずなやみふせるを、一人の聖の鉢
にかゆをいれて、匙をもちて病人の口ごに在るありけり、「誰
人にかあらん」ととうにかたわらなる人こたえて、「法然上人なり」
いうと見てさめぬ。(漢字カナ等現代用例に即し変更―編集部)
とあり、ここの僧都というのは、高野の学僧明遍みょうへん僧都のことであ
る。

また第十六の第三章に、

上人天王寺におわしけるとき僧都善光寺参詣の事ありけるか云々
と記して、法然と、明遍僧都との問答のあったことを詳しくつづ
っている。この問答のあと、明遍僧都は深く法然に帰依したとい
うことである。

このことといい、かゆの施食というのも、自分とはるに足らぬ凡
夫であるが、それを法然から念仏のありがたさを知らしてもらって、
漸く生死を越えることが出来たという、明遍僧都の心の遍歴をあら
わしたものと想像出来る。

またこの施食のことを、浄土宗の社会福祉のはじまりであると、
社会福祉に活動する人は解釈する向きもある。

夢を素直に解釈すれば、そのような説が出て当然のことである。

なき人のために念仏を廻向し候えば、阿弥陀ほとけひかりをはなちて、地獄餓鬼畜生をてらし給い候えば、この三惡道にしずみて苦を受くる者、そのくるしみやすまりて、いのち終わりのち、解脱すべきにて候。

(法然上人『往生淨土用心』)

先立たれた方のためにお念仏をご廻向すれば、阿弥陀さまは光を放つて、地獄・餓鬼・畜生の三惡道に堕ちて苦しみにさいなまれている人をも照らしてくださいます。

そしてその苦しみは止み、そこでのいのちが尽きた後に三惡道から離れて極樂へ往生し、覺りを開くことができますのです。

心の伝承

日本各地には、仏事や神事にまつわる、特色豊かな風習や儀礼が伝わっている。それらは仏事、神事という宗教行為の枠を超えて日常生活に根付き、家庭や地域の規範となるなどの役も担ってきた。どれも、地方により異なる気候や地形、生活様式などと密接な関係にあり、初めて訪れたところで変わった風習（こちら側にとっては）を見たり聞いたりと、妙に驚いたり感心したりするものだ。なおかつ、その淵源や意義を、明確に整然と説明されたりすると、いよいよ興味も深まってくる。ところが実際には、今となってはいいつつ頃から、なぜ行われるようになったのかはつきりせず、中には「かたち」だけが残っている、という場合もある。

こうなると当然、説明のつかない儀礼や風習などを行う意味はないのではないか、といった批判の声も出てくる。合理性重視の昨今はおさらで、伝承されてきた儀礼、風習の衰微や消滅という現実には、そうした声が少なからず影響しているのだろう。そんな実状にあつて、内田樹氏の「起源が言えないのが儀礼の本質」（新潮社『現代霊性論』）とする指摘などは、妙に説得力ある言葉に聞こえてしまう。

それにしても、そうした風習、儀礼の伝承が先細りとなっているのは明らか

だ。「さびしい、残念」などといった感慨を吐くくらいでは済まされないであろう危機感を、個人的には持っている。しかしそこには、さまざまな要因が複雑に絡んでいるため、おいそれと復活がかなうものでもなく、もどかしい。

筆者の住む地域の事例を二つばかり挙げてみよう。

お彼岸やお盆に、お寺や近所親類の家にお参りに行った際、「お静かでおめでとうございます」と互いに挨拶を交わす風習がある。

今の寺に入って十五年、さすがに「当たり前のこと」となったが、はじめの数年間は大いに戸惑った。そう挨拶されても、どうしても同じ言葉が出てこないのである。亡くなった方々を供養する期間・場での「おめでとう」にどうしても違和感があり、とくに新盆を迎えた方などには口が裂けても言えなかった。

なぜ、「おめでとう」なのか。正月同様、お彼岸やお盆は一年のうちで大きな節目となるものだ。今年もそれが迎えられ、先祖を供養することができた、それが「おめでたい」という意味が込められていたのである。そう言われてみれば、なるほどと思うし、今さらながらのようにいい挨拶だなとも感じる。

が、この言葉を交わすのはたいいてい年配の方で、若い人の口から聞くことはあまりない。何年も違和感を持っていた筆者が偉そうには言えないが、いずれ

この挨拶が交わされなくなるとしたら、本当にさびしい。

もう一つは「念仏ばあさん」。葬儀の際、近所のお年寄りが喪主宅に集って鐘を打ち鳴らしながらお念仏を称えるのだが、そういえばここ十年くらいほとんど見られない。もともと宗派に関係ないとも聞き、このことは葬送においてお念仏がいかに普遍性も持つものとして修められてきたかの証左ともなろう。

人の死を悼み、来世の安からんことを祈り、故人の生前を偲ぶなどの意味が込められた、一連の葬送、先祖供養にまつわる風習や儀礼は、死者のみならず生者へのやさしさや思いやり、誠実さといったものも込められていよう。心の双方向の通い合いである。こうしたよき伝統が衰え、消えてゆくのは、率直に言って残念だ。時代の趣向と言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、残せるものはなんとか残したいと、つとに思う昨今である。風習や儀礼の伝承は、人のあたたかい心の伝承となるはずだから。

田の苗も背を伸ばし、陽の光りも日に日に力強さを増している。お盆もすぐそこ。震災によって大勢の犠牲者が出た。今年は「おめでとう」と素直には交わしにくい、だからこそ、いのちの尊さをあらためて心に刻み、深い祈りをささげるお盆としたい。

（小村 正孝）

「法然上人をめぐる人々」

師
を慕う

親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第二回

親鸞のその問いに答え——

四

親鸞のその問いに答え、苦しみ悶える月日から彼を解放したのが法然上人であったのである。

法然上人の教えをうけ、親鸞は人生の核心と価値にふれたのであった。彼は山を下り、恵信と家庭を持つことになった。

妻帯したことを親鸞は恥じてはいなかったが、それを誇示する気持ちもなかった。

伝教大師最澄。慈覚大師円仁。慈恵大師良源。恵心僧都源信……

彼等はみな、生涯女性と交わらず、厳しい修行の果て、悟達した聖者であった。生涯を清僧として生き、他者の利益のために生涯を使い尽くした人々であった。

否、彼等を先頭に、その後には三百年にわたる叡山の歴史があり、そこには後に続く有名無名の数知れぬ僧たちの、命がこもる重い歴史が息づいていた。たとえ今の叡山に墮落

したところがあるにせよ、叡山が多くの聖者を輩出し、彼らの命が今も息づく山であることには変わりなかった。

――だが親鸞は……。

二十年間の修行の果てに、彼自身では到底、自利利他の生涯を清僧として生きぬくことの困難さを知ったのである。

清僧の生活は親鸞には及び難いものであった。親鸞が叡山を下りて歩きはじめた道は、天台に対して上下の道ではなく、別の道であったが、彼は心の奥深くでは常に、女性を知らず、家庭の幸せを持つことなく自利利他の生涯を生きぬく人々を一步も二歩も下がって仰いでいた。

家族を持つての流人生活の厳しさを範光に知られて、親鸞はわずかに頬を赤らめた。

と、範光は重ねて、

「これから如何なされます。明日にでも京に帰りたいたいお気持ちであろうが、それにしてもこの時代と大雪。三人のお子を連れてでは雪

解けを待つしかありませんまい」

「この地で法然上人のみ教えに帰依した若者がおります」

親鸞は答えた。自身が京に行くことが不可能なことを知ったとき、善太郎のことが頭に浮かんでいた。

善太郎は今年十九歳。親鸞が越後にきて以来、都からの流人が珍しかったのか、何かといえは親鸞のもとに出入りしていつしか浄土の法門に帰依した若者であった。

「この者を、明日にも師僧健勝の程をたしかめに京に遣わそうと思います」

眸をあげて親鸞はいった。

「おお、それは何よりの好便ではありませぬか。まずはその者を吉水に遣わされませ。吉水に行かれれば、法然上人がどちらにお出でか手がかりが掴めましょう」

そういうと範光は、

「そうだ、わたしが竹ノ内国府の役人に話して置きましょう。善太郎とやらを、国府に立

ち寄ってから出立させなさればよい。国府役人の書状があれば、道中、何かと便宜があるう」

といった。

五

その夜は国府の館に泊るのだ、という範光が供の者とともに帰っていった後、呼ばれてやってきた善太郎に親鸞はいった。

「善太郎、わたしは今日、ここに勅使をお迎えして順徳天皇様のご赦免に与った」

そう言い始めるや、深い感慨に襲われて親鸞は言葉を切った。

ハツとした様子で、若者は眸を輝かせて親鸞のつぎの言葉を待っている。

呼吸をととのえるようにして親鸞は言葉を継いだ。

「わたしとしては明日にも京に上って法然上人のみ許に馳せ参じたい。しかしこの大雪だ。家族を連れての上京となれば、雪解けまで待

つしかあるまい。そこでだが、善太郎、そなた準備の出来次第、京に行つてはくれぬか」

「京に行けて嬉しうございます」

善太郎は答えた。

「お任せください」

若者は胸を張った。

「都の方には難儀な大雪でも、土地の者は慣れております。都に行つてどうすればよいか、お教え頂ければ一っ走りでございます」

親鸞は大きくうなずいて、

「わたしはこれから、そなたに託す師僧への消息を認めよう。そなた、準備ができれば明日にもここに参つてほしい」

吉水の草庵は荒れ果て、赦免になった法然上人がこの草庵に戻られたかどうか分からない、と範光は言っていたが、親鸞は吉水の草庵の下働きをしていた道蓮が、同じく草庵の煮炊きを手伝っていた満と、所帯を持ったことを思い出していた。

二人は親鸞が恵信を妻にするよりも早く、

吉水近辺の長屋に家を持つて所帯を構え、夫婦で吉水に仕えていたのである。

たとえ、長屋の一角とはいえ、自分たちの家を持ったからには、余程のことがないかぎり、他に移つてはいないはずであった。

また法然上人が配流地におられても、法蓮房信空をはじめ何人かのお弟子は京に残っていたから、道蓮と満は引きつづき彼らの世話をしているのではないかと思われた。

（善太郎には、吉水でまずこの道蓮を訪ねさせよう）。親鸞はそう思った。

（この五年のうちに、万一、道蓮夫婦がどこかに行つてしまい、京に残つたお弟子達の行方も分からないならば、範光の邸を訪ねさせればよい）。

そう心づもりした親鸞は、その夜、机に向かい、薄暗い灯火の灯影に身を寄せて、法然上人への消息をしたためはじめた。

「法然上人様、師僧に置かれましてはその後、ご健勝であられましたでしょうか。配所に在

つて過去五年。お便りをさしあげる伝手もない日々でございましたが、弟子愚禿親鸞、一日たりとも師僧の御上を思わぬ日はなく、そのみ教えに思いを巡らさぬ日とてございました」

万感、積もる思いに筆をもつ親鸞の胸は熱くなった。

六

書き進むうちに親鸞の目からは涙が頬をつたわって行く。やがて彼は机から顔を背けると号泣した。

「……早速にも京に上り、師僧にお目にかかりたく気持ち焦ります」。

しかしお師僧様、妻とともに越後に配流されました私は、今年三月、新たに乳飲み子を儲けました。只今、三人の子の父となっております。加えて今年の冬、当地は近年稀にみる大雪に見舞われました。乳飲み子を抱えての京への旅は、雪解けを待たねば不可能な状

況でございます。

心ばかりが焦り、そこで代わりに土地の若者善太郎を遣わしました……」

翌朝、十二月三日、

「京に行けるうれしきで昨日はよく眠れませんでした」

といってやって来た善太郎に親鸞はいった。

「ここに、法然上人様と道蓮殿に宛てた文がある。法然上人様吉水にお帰りかどうか、ここでは分からぬ。しかしまず、そなたは吉水の袂にお住まいの道蓮様をお訪ねせよ。道蓮様が万々よしなお計らいくださるであろう」

万一、道蓮の行方が分からないときはどこに行けばよいか。親鸞は在京中の注意を細々と善太郎に言い聞かせた。

蓑と蓑笠に身をかためた若者は思い入った表情で親鸞の言葉を聞いていたが、やがて膝をついて一札すると、降りしきる雪の中を京



を目指して旅立っていった。

善太郎の帰りを待つうちに二十八日が経った。

晦日の夜になっていた。

範光は京を出立してから親鸞の草庵に着くまで十六日をかけたという。勅使一行の旅であれば、いかに急いだといっても道中休息をとったはずで、範光たちは越後への雪道をひたすら走り続けてきたのではないはずであった。

その彼らは、竹ノ内に来るのに十六日を掛けていた。であれば、雪に道をいかに阻まれたといっても、竹ノ内から京への往復、若く身軽な善太郎の足を考えるならば、二旬の余を見ておけばよいのではないか。

善太郎が発ってから今日であらかたひと月が経つ。そろそろ戻ってきてよい日々であった。親鸞は落ち着かなかった。

バサッと、また樹の枝に積もった雪が、雪

の地面に落ちる音がした。

雪に覆われて静まり返った晦日の夜が深々と更けて行こうとしていた。

親鸞の草庵では、後年、善鸞と呼ばれることになる幼い息子、そして小黒女房と呼ばれることになる幼い娘が、父の側らでおはじき遊びをしている。

バチッ、バチッと小さなおはじきの石同士が当たる音があたりの静寂を破っていた。

成人後、信蓮房と呼ばれることになる乳飲み子を膝に抱いて、幼い二人のそんな姿を親鸞は見ていた。

土間からのひっそりした物音が、時にはおはじきの音とともに雪夜の静寂を破っている。恵信が土間で夕餉ゆげの後片付けをしているのであった。

とその時、バサバサと簀の雪を払うような物音が表でした。

(つづく)

舞 見 御 中 暑

年 三 十 二 成 平

浄土門主
知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三二

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (二二) 〇六〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

浄土宗事務総長

里見法雄

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3002 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二二六一

学大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8665 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
理事長 麻生諦善

淑徳SC中等部・高等部
校長 大島謙

学校法人佛教教育学園
学校法人東海学園

理事長 水谷幸正

舞 見 御 中 暑

平 成 二 十 三 年

本應寺 隱老

熊谷 靖彦

〒849-0401 熊野市堀田町馬場下甲六六二・一

大鹿山弘経寺住職

金田 進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

十八番長露地会
吞龍上人祈願所 毎月八日縁日

蓮 馨 寺

住職 桑原恒久

〒350-0066 川崎市津雀町七・一
電話〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二二）〇六七六

養運寺

田中 光成

〒194-0002 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄 土 寺

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三（三五八三）三六三〇

明福寺

福井 豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

鶏頭山安楽寺

飯田 實雄

〒399-0115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五（八三三）一三六〇

清水湊

忠高山 實相寺

家康公祖母の旧地

玉桂山 華陽院

住職 堀田卓文

勝 願 寺

〒365-0033 埼玉県鴻巣市本町八・一・三二
電話〇四八（五四二）〇二二七

お骨仏の寺

一 心 寺

〒543-0062 大阪市天王寺区達阪二・八・六九
電話〇六（六七七）〇四四四

舞 見 御 中 暑

平 成 二 十 三 年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

〒112-0002

東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0003

世田谷区奥沢七、四一、三一
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、一一二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四、七、九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、二、二八
電話 〇四六七(一一)〇七〇三
FAX 〇四六七(一一)五〇五一

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四、一一、八

光取寺

大室了皓

〒141-0001 東京都品川区上大崎一、五一、〇
電話 〇三(三三四一)八三八四

浄土誌上句会

●鉄柱

〔特選〕島繫ぐ橋の鉄柱牡蛎育つ

石原

新

今回はむずかしい題に、誰もがとまどっている様子が見える。この句の鉄柱は橋脚である。満潮線から下のあたりに、牡蛎がびつしりと育ってくる。年を経るとその辺が太くなつて見えてくるのである。

〔佳作〕鉄柱に錆這い上がる立夏かな

斉田 仁

鉄柱の匂い血に似て夏隣

金井 楨

鉄柱という囲碁用語梅雨の寺

鍋谷 宗治

●群青

〔特選〕竹散つて群青の空近づきぬ

村田

篠

草木の葉の色づくのは普通には秋だが、竹は春になつて黄ばむ。竹の秋である。これは春の季語だが、この葉が散ると、夏の青空が

一気に広がるように見える。下の句の「近づきぬ」は、ここをとらえたものだろう。

〈佳作〉

群青の空晴れ晴れと鯉のぼり

河合富美枝

風あそぶ土堤群青に犬ふぐり

井村 善也

若葉風群青色の絵具解く

増田 信子

●自由題

〈特選〉

風五月艇庫を開ける女子部員

浜口 佳春

学校か会社の漕艇部である。五月になるといよいよボートやヨットの季節が始まる。とはいえ海に浮かべるまでには、艇の手入れに時間がかかろう。「風五月」とあるところをみると、女子ヨット部員だろうか。

〈佳作〉

短夜の灯を消しそびれ眠りけり

中島富士子

すり寄りし犬の肋や五月晴れ

山口 信子

前を行く若々羨しや五月来る

吉崎美和子



自由題

兼題
季語ではありませぬ

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会 〈編集部選〉

■鉄柱

鉄柱に彩りこぼす瓜の花
鉄柱や遅霜予報の桑畑
鉄柱を攫いし津波弥生逝く
夏海鉄柱深く穿たれて
かげろうの死のおびただし大鉄柱
この頭痛鉄柱のごと春深む
鉄柱の錆錆取りをして未だ匂う
鉄柱に敵意を見せて夏の猫
魔坑の鉄柱生い繁る若葉
手のひらに鉄柱の錆立夏かな
大夏野鉄柱の影横たわる

河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
鳥羽 梓
三宅政吉
笠井亜子
山内桃児
井草芳郎
柄本圭子
山口信子
浜口佳春

■群青

群青の空晴々と鯉のぼり
群青の空に雲雀のしばし入る
雪渓を横目に群青朝日受く
軒下は群青われはかたつむり
はつなつの群青を着て立ちあがる
春の海群青深く深く雨
パレットに群青ねじりつけ立夏
群青の空薄墨の鯉幟
群青の真つ只中に仔猫生れ
群青に和して半島青葉なり
息を吞む群青の海鳥帰る
群青の絵の具が減って五月闇

河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
内藤隼人
中嶋いづる
笠井亜子
小林苑を
齊田 仁
井口 栞
山内桃児
石原 新
江藤美美

締切・二〇一一年八月二十日

発表・『浄土』二〇一一年十月号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

露座仏に日差し傾く落花かな
筍の吐息にしめり新聞紙
行く春や地震も連れて早よ行けよ
藤垂れて夕日に映える露地の寺
持ち歩く下戸の遺伝子花は葉に
静脈が五月の腕で盛り上がる
卓袱台の喜怒哀楽や昭和の日
鯉のぼり吊るさるるとき口開ける
でむしに生まれ死ぬるよ雨静か
あした母の日薔薇をぐにやと噛む
カラカラと古民具廻る立夏かな

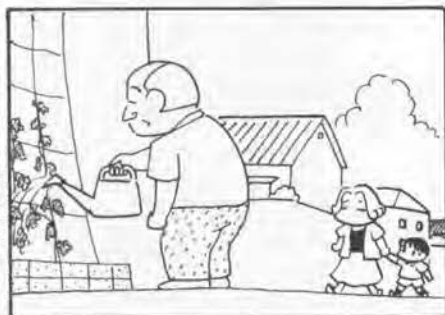
河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
森 懐人
齊田 仁
工藤 掉
小林暢夫
目黒 裕
三宅政吉
小林苑を
井口 栞



82 かい目 さっちゃんはネッ

かまち♡ひろう

かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞・以上夕刊)



悲しみの空に飛び交う囂かな 岱潤

大震災から三か月がたった六月中旬、東京の人権同和推進委員会で石巻に行つて、被災されたお寺さんや避難所の方々とお会いしてきた。

津波に飲み込まれたこの地区は、未だ復興の兆しすら見えない。ご遺体があがり火葬された方でさえ、百ヶ日が来ても納骨することもできず、本堂に安置されたままの方が大半だ。

未曾有の大災害と一言で言うが、規模も質も想像を絶している。対策が遅い遅いと中央政府を攻める声が大いだが、今回の状況はそんな単純なものではない。

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
鹿谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相院)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

それよりも日本人は冷めやすいというか、五月のゴールデンウィーク以後、ボランティアと支援物資が激減しているという。いくら温度差があっても忘れてしまえるものではない。本誌でもあえて今月号に大震災関係の記事を掲載した。未だ小学校の体育館で避難所生活をされている方が三五〇人以上いらした。その方々がおっしゃっていた「私たちのことを全国の人に知らせてください。私たちのことをいつまでも見守ってください」と。

仏教で最低の心を表現する言葉に「無慙無愧」がある。以前金岡秀友先生はどのように教えてくれた。仏教では悪いことをを行うよりも最低の心の状態がある。

それが無慙無愧だ。これは隣の人の状態に全く心が動かなくなることだ。隣の人がどんなに悲しみ、苦しんでいても「あ、そう」という心だ。これだけはない。ならない。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻七八月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年六月二十日
発行 平成二十三年七月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒〇五〇〇〇一

東京港区芝公園四七四明会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八 六九四七

FAX 〇三三三七八 〇三三六

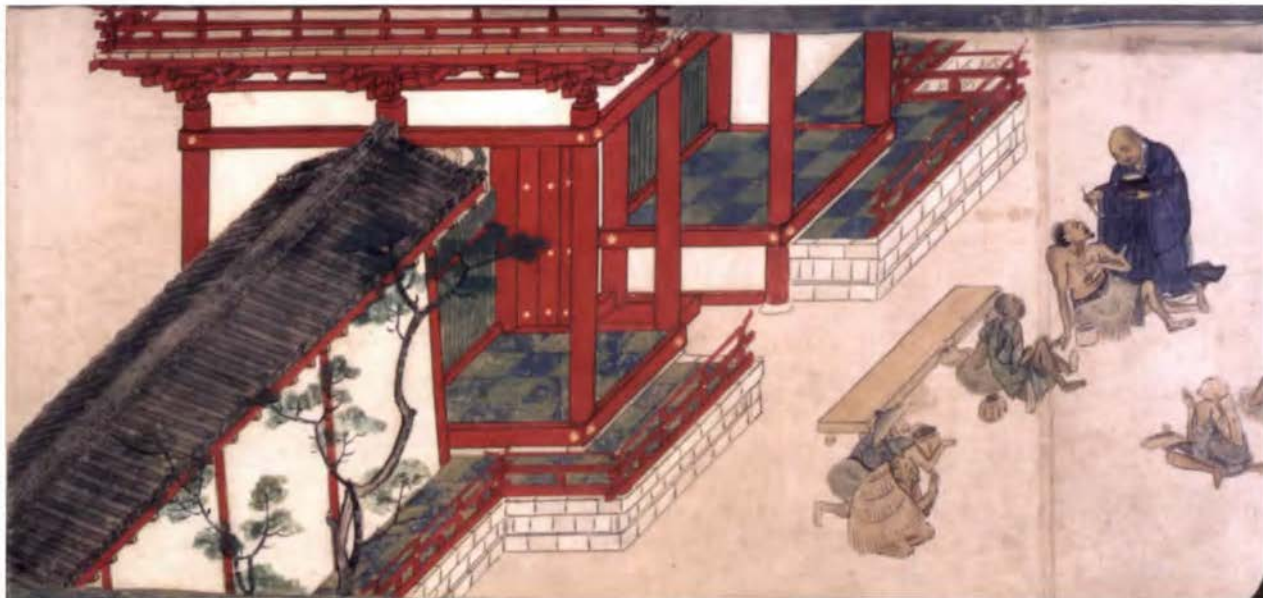
振替 〇一八〇・八・八二八七

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

四天王寺六時堂

聖徳太子創建の我が国最古の仏法霊場。西大門から見る夕日が西の海に没するとき、極楽浄土を観相されたという。法然上人五十一歳のみぎり、参詣して往時を思い、お念仏を唱えて日想観を修められた。また高野の学僧明遍僧都が霊夢のなかに、

法然上人現れて悩み苦しむ多くの病人たちに粥を食べさせておられるところを見た。明遍僧都は世の濁りと我が身を思い、専修念仏の門に入ったと伝えられている。



法然上人鑽仰会の



当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



『法然上人絵伝・残欠二巻本』より